
アカデミック・ラブソディ ～踊るティーンエンジャー～

わっふる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカデミック・ラブソディ　　踊るティーンエンジャー

【Nコード】

N8191C

【作者名】

わっふる

【あらすじ】

俺の学校に16歳の理事長がやってきた。大会社の社長令嬢らしいこの女は、毎日毎日俺に無理難題ばかりを押し付けてくる。図書館にマンガを入れる、テストを廃止しろ、食堂のメニューにフランス料理を加えろ……そんな我が儘お嬢様に振り回されていく内に、俺の中で何かが変わっていく。愉快で痛快で、どこか切ないドタバタ学園コメディー

第1話：エンカウント（前書き）

初投稿です。

結構な長編になる予定ですが、どうぞ最後までお付き合い下さい。

感想・批評などを頂けると非常に励みになります。

要望・感想・非難等なんでも大歓迎ですので、宜しければ書き込み
宜しく願います。

第1話：エンカウント

もう9月も半ばを過ぎているにも関わらず、やたらと暑い日差しの下、俺は通学路をひた走っていた。

時刻は8時30分。あと10分で予鈴がなり、15分後には授業が始まる。

頭の中で算盤を弾きつつ、スピードを速める。

（このままのペースで行けば、なんとか間に合う。だが――）
そこで足が止まる。

無常にも、俺の目の前で展開される赤信号。しかも、交通量が多いせいか、やたらと信号の変わりが遅いことで有名な交差点だった。
10秒……20秒……30秒……イライラしながらランプが変わるのを待つ。

が、1分経っても信号は変わる気配すらない。

（かくなる上は……）

俺は覚悟を決め、横断歩道へと足を踏み入れる。途端に鳴り響くクラクションの嵐。

俺は心の中で平謝りしながら、小走りで横断歩道を渡りきった。

そのまま速度を緩めず、今度は見知らぬ民家の裏庭へ突入。この家の庭を通過すれば、ちょうど学校の正門の真横へと出れるのだった。噂では何度も耳にしていた裏ルートだったが、実際に通り抜けるのは今日が初めてだった。

身を屈めて軒下を疾走し、塀を乗り越えようと、ようやく校門が視界に入ってきた。

時計に目をやる。

時刻は――8時41分。

「ふう……間に合ったか」

安堵の息を漏らす。

走り疲れた呼吸を整えるように深呼吸をし、首元のネクタイを緩めると、校舎へと歩み出す。

と、その時

「お前」

突然、背後から冷ややかな女の声が投げ掛けられた。

ゆっくりと後ろを振り返る。

そこには、白色のワンピースを身に纏った、見た目13歳ぐらいの少女が立っていた。

やや吊り上がり気味の目つきと、綺麗なブロンドの髪を桃色のリボンでツインテールに纏めているのがことなく幼い印象を受けさせる。

少女は俺はジロジロとねめつけると、再び口を開いた。

「お前、何か私に謝ることはないか」

信号を無視した挙句、他人の家へと無断侵入したのを見られていたのだろうか。

だが、そのことについて何の関係もない、というか見ず知らずの人間に謝罪する、というのはどう考えてもお門違いではないだろうか。「お天道様に誤ることはあっても、あんたに謝罪しなけりやならないことは思いつかないね。」

極めて正論を言っただつたのだが……少女は眉をキリリツと吊り上げると

「バカ者！生徒の過ちを正すのは教職員の務めだろう！」

口角泡を飛ばしながら怒鳴ってきた。

……って、ちょっと待て。生徒？教職員？外見、中学生も怪しいコイツが先生だと！？

驚きで思わず声に出してしまった。

すると、少女はさらに眉を吊り上げると、顔を真っ赤にし、俺の耳を掴んで自分の口元へ持っていくと、

「ぶ、無礼者！」

と叫んだ。

鼓膜が破れるのでは、と思わせらるほどの大声に、俺は思わず耳を抑える。

そんな様子を見て、少女は復讐完了と言わんばかりに、うんうんと頷くと

「まあ、先生というのは適切な表現ではないな。私はお前のような無知でだらしが無くて失礼で、愚かで見つとも無い無礼な人間と毎日顔を突き合わせていられるほど寛容な人間ではないのでな」

なんだか言っていることがループしているような気がしたが、ともかくヒドい言われようだった。よくもまあ、初対面の人間をここまでボロクソに貶せるもんだ。

失礼で無礼なのは、どっちかと言えばコイツのほうのように思えるのだが……。

「先生じゃないんだったら、誰なんだよ」

すると、少女は待つてましたとばかりに、”ない”胸を張り

「星陵高等学園理事長兼校長の、皇堂・D・ティナートだ」

訊いてもいないのに、フルネームまで宣言してくれた。

えーと、皇堂・D・ティナートだったか？

たいそう長くて立派な名前だが、どこの国の人間なんだオマエは。

いや、そんなことはどうでもいい。俺の学校の理事長は、やたらと腰の低い小太りの中年男だった筈だ。

何を間違つても、無駄に偉そうな小柄な金髪美少女ではなかったぞ。俺の疑問に、少女は腰に手をやり、威張るように答える。

「ああ、その男なら昨日付けで退職した。なので、代わりの理事長として私に白羽の矢が立った、という訳だ」

どうだ、と言わんばかりに、”清々しいまでに”ぺったりとした胸を張る、皇堂・D・ティナート（ええい、呼び辛い！）だった。

「そういう訳だから、お前、取り敢えず職員室に案内してくれ」

「いや、ちよつと待て。俺は今から授業が……」

「そんなもの少しぐらいサボっても大事ではないだろう。それに、

どうしても言うなら、理事長権限で出席扱いにしてやるさ」

「いや……でも、だが……」

尚も渋る俺だったが、ジトツと睨んでくる皇堂に根負けし、職員室へと足を向けた。

思えば、この時からだったんだろうね。

俺の一風変わった、愉快で、痛快で、どこか切ない高校生活の始まりは。

第2話：コーヒー

「なんだ、この犬小屋は」

職員室へ赴き、教職員に挨拶を済ませ、理事長室へ案内されての第一声がコレだった。

案内役の、頭の薄い数学教師は眉をピクツと震わせたが、すぐに安っぽい笑顔を作り、

「皇堂様にとつては少々窮屈に感じられる部屋かもしれませんが、何卒ご容赦のほどを……」

表面上は笑顔だが、隠しきれない怒りの感情が俺に伝わってくるのが笑えるね。

そんな数学教師のオーラも露知らず、皇堂は、私は己の裕福さを他人にひけらかすような卑しい人間ではないので全く気にしていないぞ、などと火に油を注ぐようなことを言っただけ。

それにしても、無駄に立派な名前だな、とは思っていたが、コイツは本当にどこかの大会社の社長令嬢か何かだったのか。

でも、何故そんなヤツが、しがない私立の理事長なんかに就任したんだろうか。金持ちの考えることは理解できんな……

俺が自分とは縁遠い人種について思いを馳せていると、いつの間にやら数学教師が退散していた、

これ以上、ここにいると理性が消し飛んでしまう、と判断したのだから。賢明な判断だ。

「さて、お前。荷物の整理をやってくれ」

皇堂がいきなり切り出す。

「整理だと？」

「そうだ」

俺は部屋を見渡す。

教室よりは遥かに広い部屋に、所狭しと積み上げられるダンボールの山。何箱あるのか数えるのも面倒なぐらいの量だ。

よく見ると、ダンボール1箱1箱に内容物の品目が書かれてあった。本、書類、CD、DVD、コンポ、テレビ、冷蔵庫、クーラー、簡易コンロ、固定電話、鍋、レトルト食品、パソコン、家庭用ゲーム機、マンガ、同人誌、プラモデル、フィギュア、ポスター……

……明らかに、高校の理事長室には相応しくない代物が大量に紛れ込んでいるように思うのは俺だけなのか。というか、ここに住み着くつもりなのだろうか。

「あれを全部俺1人で片付けろってのか？」

当然の疑問だった。

「当たり前だろう。私はか弱い可憐な女性だ。重労働をするような体の作りはしていない」

こちらも当然とばかりに、アホなことをほざいてやがる。

「こんな大量の荷物、俺1人で片付けれる訳ないだろう！？何時間かかると思ってるんだよ！」

皇堂は面倒くさそうに返事を寄越してきた。

「だから早く取り掛かれと言っている。さつさとしないと日が暮れるぞ。」

尻を蹴り飛ばされる。

「お前な！さつきから何様のつもり……」

「信号無視に住居不法侵入。職員会議に掛け合ってみればどうなるんだろうか。生活指導の名の下に、とても放送できないような恐ろしい拷問が与えられるかもしれない。いや、それだけでは甘い。皇堂家の名を使えば、社会的に抹殺してしまうなど容易いか……」

……脅迫のつもりなのだろうか。

信号無視に住居不法侵入がそんな大罪に値するとは初耳だが。

適当に聞き流しておくのも1つの手ではあったが、俺はそうしなかった。

何故かって？

皇堂の眼がマジだったからさ。

コイツはマジメにそう考えているのだろうし、それを可能にするだけの権力も持っているらしいことは先ほどの会話から想像できた。

厄介なヤツに関わっちまったもんだ。厄日だな、今日は……

「はあ……やればいいんだろ、やれば」

すると、皇堂はニツコリと外見だけは天使のような微笑で、俺に一枚の紙を渡してきた。

「それじゃあ、まずはダンボールの開封。それから、この見取り図の通りに物を配置。電化製品はコンセントに繋ぐのを忘れずにな。その後、この部屋でインターネットとオンラインゲームが出来るようにしてくれ。それが済んだら、食料と飲み物の買出し。あ、私は炭酸が大嫌いだから、気をつけるよ。私の好物はブラックのコーヒーだ。よく覚えておけ」

突っ込みどころ満載ではあったが、俺はあえて無視して、生返事を返しさっそく手近なダンボールの開封に取り掛かった。

ダンボールを開ける、内容物を取り出す、見取り図の通りに配置する——この作業を繰り返すこと8時間。

ようやく最後のダンボールが空になった。

言うまでもないだろうが、皇堂は最後まで何一つとして手伝おうともしなかった。

予想外のダンボールの密封強度に悪戦苦闘している俺の横にちょこんと座って、マンガを一心不乱に読み耽っていた。

その姿はなんだか……いや、何でもない。

兎にも角にも、引越しは終わり、俺はギシギシと鳴る体を労わるように揉み解す。

（こりゃあ、明日はひどい筋肉痛に悩まされるだろうな……）

などと、考えながらしばらく呆けていると、背中に何か硬いものがぶつかった。

振り向くと、1本のコーヒー缶が転がっていた。

その先にはマンガを読んでいる皇堂の姿があった。

「報酬代わりだ。ありがたく受け取れ」

報酬もなにも、コレは俺が買ってきたコーヒーじゃないか。

俺は声には出さずに心の中で呟いた。

その時の皇堂の姿を見ると、突っ込むのは邪推に思えたからさ。

マンガ片手でいかにもついでとばかりに言い放った皇堂だったが、

微妙に顔が朱に染まっている。

傲岸不遜がモットーみたいなコイツにも照れという文字は存在する

んだな……などと俺が感動していると、

「帰る」

と言い、皇堂はマンガを放り出し、ドアへと向かって歩いていった。

ドアノブに手を掛けると、こちらを振り返らず、

「この辺りで美味しいフランス料理店はあるか？」

と尋ねてきた。

俺は意地でもこっちを見ようとしないう皇堂が可笑しくなり、笑いを堪えながら答えてやった。

「美味いかどうかは知らんが、駅前至高そうな店構えの洋食屋があるぞ。」

皇堂は一瞬こつちを振り向くと、信じられないセリフを呟いて部屋から出て行った。

俺は一瞬呆気にとられた。

皇堂は、確かにこう言った。

「ありがとう」と。

夕焼けに照らされる皇堂の顔は、なんだかとても可憐で美しく映っていた……

と、そこで再びドアが開いた。

「言い忘れたが、明日の朝6時にここに来てくれ。書類仕事を手伝わさせてやる」

……前言撤回。皇堂は、可憐でも美しくもない。

第3話：転校生

「杏也、腹が減ったぞ。」
「そうだろうな、俺もだ。」

時刻は午前6時半。

学校内には殆ど人の影が見当たらない。
せいぜい、部活の朝練組がチラホラ登校してきている程度か。
それなのに、部活動に所属すらしていない俺が、こんな時間に学校にいるというのはどうしたことだろう。

「購買でフレンチトーストとベーコンエッグ、それから濃いコーヒーを買ってきてくれ。もちろん作りたての温かいヤツをだぞ」

俺がこんな早朝から登校する原因となっているティナ——本名、皇堂・D・ティナート（未だに噛みそうになる）が、小柄な体をソファーに埋もれさせるようにして座りながら、俺に命令を飛ばしている。
る。

黙っていれば、薄幸の美少女で通りそうな外見をしているのだが、口を開かせると奇矯な性格が露頭しちまうのが非常に残念だ。何が残念なのかは俺も分からんが。

「たまには自分でやれ。俺は今猛烈に忙しい」

俺はお前に押し付けられている書類整理で手一杯なのさ。それから、こんな時間に購買は開いていないぞ。

皇堂はつまらなそうな表情を見ると、机の上のマンガを手にとって読み始めた。

あゝ、念の為に言っておくが、杏也ってのは俺の名前だ。
下僕とはいえいつまでも『お前』呼ばわりでは可哀想だ、というテ

イナの配慮？により、めでたく名前で呼ばれることとなったのだ。
（下僕になった覚えはないが）

ついでに、俺も皇堂のことを名前で呼ぶことにした。

いつまでも、あの長ったらしい名前を呼び続けるのは面倒だからな。

それで、俺は今、ティナの命により、全生徒の履歴書に目を通して
いる。

どうやら、ティナは学校改革に乗り出したらしく、その第1歩として、素行不良の生徒の焙り出しを行うつもりらしい……のだが、俺も一応この学校の在校生な訳で、他人のプロフィールを勝手に見るのは非常にマズいように思えるんだが。

まあ、いざとなれば理事長様が庇ってくれるさ。（たぶん）

書類を眺め続けること2時間。

そろそろ学校内にいつもの賑やかさが戻ってきた。

そういや、昨日のこの時間帯にティナと出会ったんだっとな……

などと、少し思い出に浸っていると、ふいに開けっ放しになっていた窓から強風が吹き込んできた。

手にしていた書類の束が床に散らばる。

俺は腰を屈めて、慌てて書類を集め始める。

ここで、1枚の履歴書が目にとまった。

『転校生』と書かれたハンコが押してある。

「転校生が来るのか？」

ティナは、マンガから顔も上げずに返事を寄越してくる。

「ん？ああ、今日付けで2年4組に転入するらしいな。」

こいつが一応学内の動きについて情報を得ていたことにも驚きだが、転校生が来るというニュースには更にビックリだ。

2年4組といえば、俺のクラスじゃねえか。

名前は…西毬麻衣

履歴書に写真が添付してあった。

パツチリした目元が印象的な可愛い感じの女子だった。

軽くウェーブした栗色のロングヘアーも好印象を与えてくる。

これで性格が良けりゃ、さぞやモテるだろうな。

「何をニヤニヤしている」

突然声を掛けられた。

前方を見ると、ジトツと俺を睨むティナの視線とぶつかった。

「大方、転校生が自分の好みのタイプだった、とかそんなところだろう。ふん、これだから男などという生き物は……」

何事かブツブツ呟くと、マンガを投げ出しニュース番組を付けた。

アナウンサーが、どこかの動物園でシロクマの赤ちゃんが産まれた、と嬉しそうに語っている。

ボー、とテレビを見ていると、なんだかつまらなそうな表情を浮かべているティナに声を掛けられた。

「もう40分だぞ。そろそろ授業が始まるんじゃないか」

言われて我に返る。もうそんな時間か。

俺は、カバンを肩に掛けると、理事長室を後にした。

それにしても、転校生か……

可愛い女子だった、てのは抜きにしたとしても、楽しみなのに変わりはないね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8191c/>

アカデミック・ラブソディ ～踊るティーンエンジャー～

2010年10月10日00時15分発行